

5) 琵琶湖水系におけるスクミリンゴガイの分布状況について

金辻宏明・遠藤 誠・太田滋規・三枝 仁

【背景】スクミリンゴガイ *Pomacea canaliculata* は南アメリカ原産の外来貝で、日本ではジャンボタニシという名前で知られている。このスクミリンゴガイは1981年には福岡県で食用として養殖が行われたが¹⁾様々な事情から市場流通はせず、養殖場から放棄された貝は九州から近畿、静岡等に分布を広げている²⁾。このスクミリンゴガイは草類もよく摂食する雑食性で、水田で繁殖すると田植え後2週間程度の稲(水面より僅かにでている状態)が摂食されて被害を及ぼすことが知られている。逆に、その時期を経過すると水田内やその辺縁の雑草を除去してくれる生物除草剤になり得る(農薬の存在下では生息できない)といわれている(このことからこの貝はイメージアップのため「稲守貝」と呼称されている)。

【目的】近年、滋賀県下でも家棟川等で本貝の生息を側聞するようになった。また、現在滋賀県の稲作は減農薬農法を推奨しているため、本貝が今後水田に生息域を広げる可能性がある。また、琵琶湖に流入する農薬等も減ることから本貝が益々繁殖しやすい環境となり、ヨシ帯等を含む琵琶湖水環境に対して影響をおよぼす可能性もある(例えば魚類等の産卵基体植物の消失、ヨシ群落機能の低下)。したがって、本貝の生息によってこれら被害が発生するかどうか、またその影響についても予見的な調査研究が必要である。

そこで、本研究ではスクミリンゴガイの琵琶湖固有生物等に対する影響を明らかにする一環として、琵琶湖湖岸のヨシ群落を中心に本貝および卵の生息、産卵調査を行い、現時点における本貝の分布状況の把握を試みた。

【方法】琵琶湖湖岸(近江大橋以北)のヨシ帯について概ね2km間隔で目視観察を行い、貝および卵塊の分布を調査した。なお、調査は家棟川では平成12年7月に1回、琵琶湖湖岸では平成13年4月～7月に約4週間間隔で3～4回行った。

【結果】本調査で確認したスクミリンゴガイと卵の地点および年月日は図1に示すとおりである。平成12年7月には、家棟川での目撃情報をもとに本地点を調査したところ、5mm程度の稚貝が数十個確認された。また、平成13年4月には野洲川河口部のヨシ帯で親貝が確認され、同年6月にはJR小野駅前のヨシ帯中で淡紅色の卵塊が水面より上のヨシの茎で確認された。なお、この卵塊は孵化させてスクミリンゴガイであることを確認した。

これら結果から、本貝は少なくとも琵琶湖大橋の数km北および家棟川で分布していると判断された。また、家棟川で認められた稚貝は越年親貝由来であると考えられ、再生産している可能性が高いと推察された。また、JR小野駅前の卵塊が6月中旬に確認されていることから、越年親貝は琵琶湖内ではこの時期に産卵していると考えられた。今後、この時期に生まれた稚貝が当年中にどの程度成長するか、また成熟するかを明らかにして琵琶湖湖岸のヨシ帯や水田水路等への影響を解明する必要があると考えられる。

1) 「田んぼの忘れもの：宇根 豊 著」葦書房, pp134-140.

2) 「琵琶湖・淀川淡水貝類：紀平 肇・松田征也 著」たたら書房pp36-37.

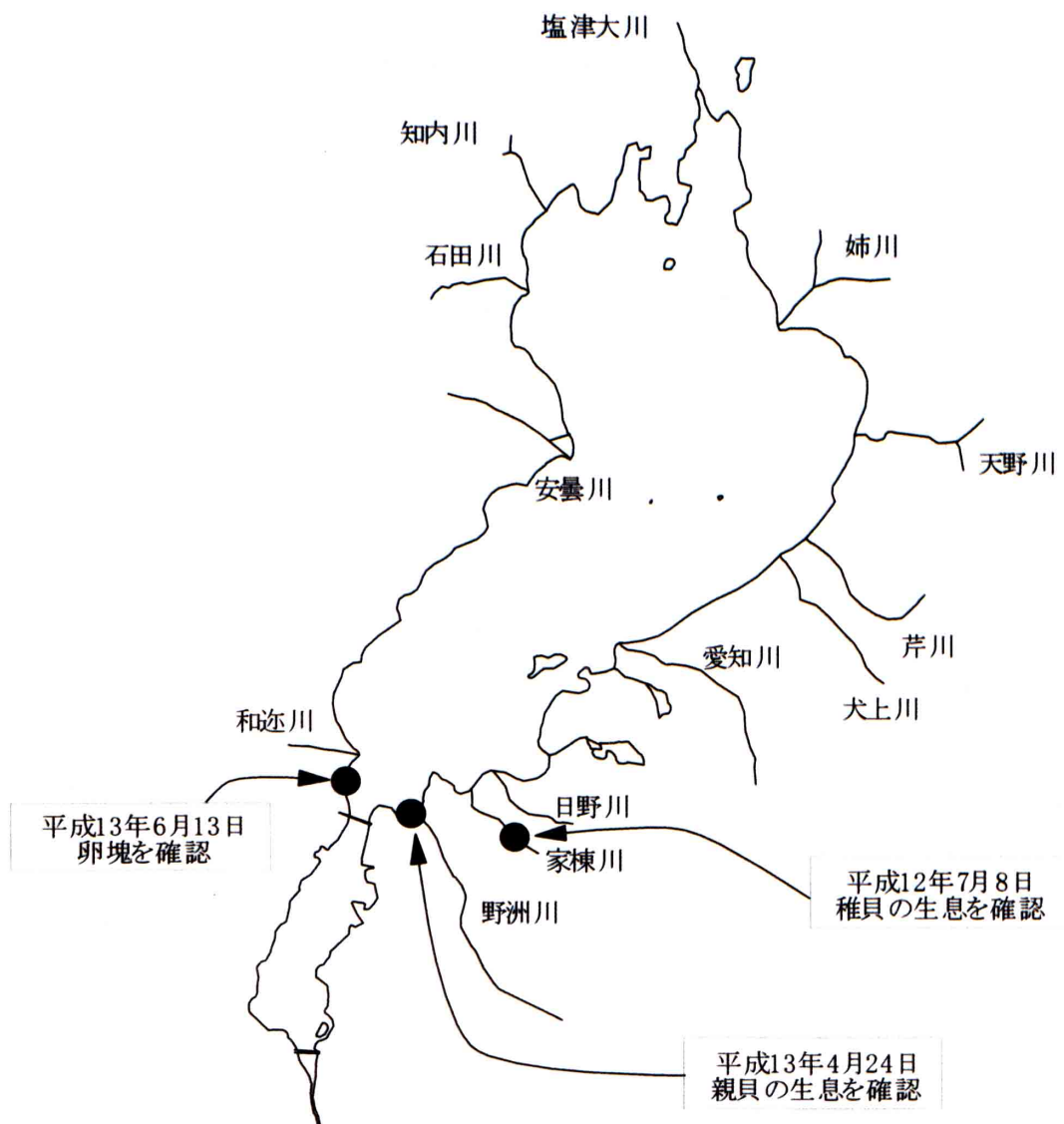


図1 琵琶湖のヨシ帯におけるスクミリンゴガイの分布状況

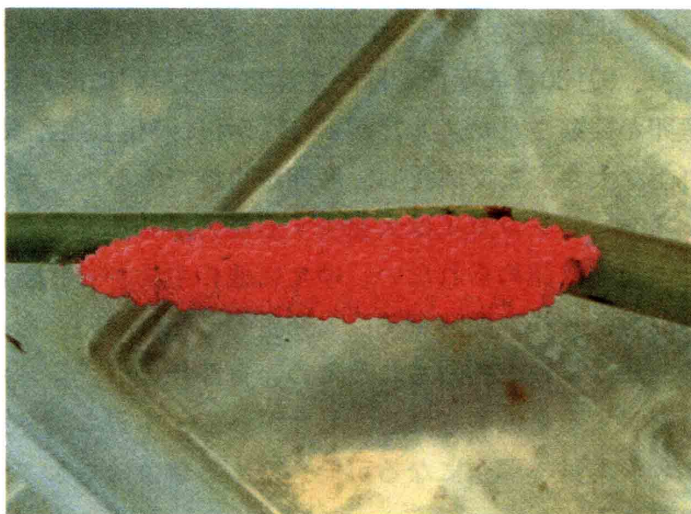


図2 JR小野駅前のヨシ帯中で確認したスクミリンゴガイの卵塊